特集：「ヒューマンサービス（対人援助）の科学」の生成

望　月　　昭・中　村　　正

本特集は，1999年，教育科学研究所のプロジェクト研究B1「ヒューマンサービス研究会」としてスタートし，2000年度から「ヒューマンサービス／対人援助科学研究会」と改組された２年にわたるプロジェクト研究における研究発表の一部を改編した論文，同研究会と共催で開かれた2000年度基礎心理学会公開講座における発表を改編した論文，そして，研究メンバーのオリジナルな研究から構成されている。

「ヒューマンサービス研究会」は，実験心理学，臨床心理学，行動分析学，社会心理学，社会福祉学，社会学などの研究者と，福祉施設などで直接援助に携わる職員あるいは施設の運営者がそれぞれの立場から，「『ヒューマンサービスの科学』というパラダイムは可能か」というテーマのもとで，それぞれの持つこれまでの学問体系と職制が持つ「ヒューマンサービス」の実践的行為への関係を紹介し，その上で，この行為に必要な，研究と実践あるいは職制間の連携の方法，また具体的課題解決に向けての新たな方法論の在り方を検討してきた。その具体的目標は，対人援助あるいはヒューマンサービスという行為に共通に含まれる独自の原理やその行為に必要な技術について，この領域で働こうとする，あるいは現職として働く人への一種の仮想テキストの形にまとめること，さらに，絶えず流動する社会的情勢の中で発生する関連諸課題について，開放的な言語行動メディアとしての「福祉・教育情報ネットワーク」を試験的に開始することであった。

同研究会は，冒頭に述べたように，2000年度から「ヒューマンサービス／対人援助科学研究会」と名称と組織を改変した。これは，当プロジェクトの母体である教育科学研究所が，文部省学術フロンティアのプロジェクトにおける基盤研究組織とすることを契機に人間科学研究所と改組されたことに伴い，当プロジェクトの活動も，その研究組織のひとつとして位置づけ直されたことによる。学術フロンティアは，「対人援助のための人間環境デザインに関する総合研究」というプロジェクト名を持つが，当研究会は，その学術フロンティアの中のコアプロジェクトである「新時代の人間環境創造プロジェクト」の準備組織のひとつとして展開することになった。

このコアプロジェクトの目標は，現状でいくつかのサブプロジェクトを持つ学術フロンティアの中で，それぞれの対人援助に関する情報の蓄積と共有化を目的とする「ヒューマンサービス・プラットフォーム（HSP）」を立ち上げていくこと，そして，それらの作業を通じて，ヒューマンサービスの新しい方法論を構築することにある。これらの作業目標は，旧研究会における「福祉・教育情報ネットワーク」の構築という目標とほぼ重複するが，規模を拡大し，かつ長期的な展望のもとにこれらを手がけることとなったものといえよう。

本特集は，そのような経過の中で，研究者側から，ヒューマンサービスという作業に関する，基礎

と応用，あるいは研究と実践との連携を前提とした方法論についてのいくつかの試論，そして実践者側からは，障害領域を中心に，現存の制度の中でのサービス実践についての課題，さらに具体的な直接援助に携わる現場の作業における課題，とりわけ，実践の場におけるサービス供給者を支えるシステムについて，それぞれの立場からの問題提起という形で構成されている。

そこでは，共通課題として，個人的レベルの問題と社会制度的な問題を，従来の伝統的な心理学と社会福祉学といった伝統的なディシプリンのもとで見られてきたように「分断的」あるいは「分担的」に捉えるのではなく，サービス消費者個人の自己決定を機軸として，その選択された行動の実現に向けて，ミクロな個人的レベルからマクロな制度問題に至るまでを，「連続的」に「連携的」に取り扱えることのできる方法論の探索が挙げられていた。

この「連携」のための方法論を探る上で，研究会の発足時に最初に提起されたプロットは，対人援助の現場において必要なヒューマンサービスの作業を，「援助」「援護」「教授」という３つの連環的機能として捉えてみるということであった。「援助」とは，ここでは，当該個人によって選択された行動の成立，あるいはその選択機会を実質的に保証するために，それまでになかった新たな人的・物理的環境を設定することを指す。「援護」とは，そうした新たな援助設定を恒久的に環境に定着させるための社会に向けての要求言語行動である。そして，「教授」とは，そうした新たな環境設定の保証のもとでの，個人における社会適応の支援作業である。

現在，学術フロンティアのコアプロジェクトの中では，本特集での成果をふまえて，ヒューマンサービスの作業において中核的な問題である「自己決定」あるいは「QOL」といった特定のテーマについて，この「援助」「援護」「教授」という機能から関連文献を分類し，そのデータベースを構築する作業が大学院生を中心に開始されている。その作業の主な内容は，関連論文の抄訳を組織的に紹介することにあるが，その目的は，第一に，多忙な業務に従事する対人援助の実践者に海外の実践研究などで先行している援助・教授の具体的方法論や技術についての情報を紹介し，現状での実践現場での課題の解決にあたってそれを参照してもらうこと，そして，第二には，データベース作成の主体となる学生諸君が，彼らの日常的な勉学・研究活動そのものが，将来のみならず現在においても，現実のヒューマンサービスの現場と機能的なつながりを持つということを実感してもらうことにある。

また，このデータベースでは，この特集でも掲載している福祉現場における進行中の実践について，ほぼそのままの形でネット上に公開し，広く外部からの助言や意見の交換を実現したいと考えている。これは，実践現場における援助者の先進的な援助を維持するため，つまり「援護」のひとつとして，当該現場の狭い人間関係を越えてより広い社会的支援を得ることを目的としている。つまり，このデータベースは，先に述べた「援助」「援護」「教授」という３つの作業を単に知識として個別に紹介するのではなく，現在進行している対人援助の実践における機能連環を促進する装置となることを目指しているのである。